長野県松本市

IWAOKAYAKATA

岩岡館跡

－発掘調査報告書－

2015.3

松本市教育委員会

岩岡館跡から北アルプスを望む

内耳鍋（土坑１出土№７）

例　言

1　本書は、平成25年5月7日～6月14日に実施した、松本市梓川倭1291番地1に所在する岩岡館跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、松本市上下水道局による梓川地区新水源地建設に伴い、埋蔵文化財包蔵地の記録保存を目的として松本市教育委員会が実施し、整理作業から本書作成まで一貫して作業を行ったものである。

3　本書の執筆は、第Ⅱ章第2節：宮島義和、第Ⅲ章第2節：伊藤　愛、第3節2：原田健司、その他：竹原　学が行った。なお、第Ⅱ章第1節地形と地質については、森義直氏による現地調査所見に基づき竹原が概要を記した。

4　本書作成に係る作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄・注記　佐々木正子・内田和子　　遺物接合・復原　市川二三夫・伊藤　愛

遺物実測　焼物：竹内直美、石器：白鳥文彦・原田健司、拓本：洞沢文江（銭）

写真撮影　伊藤　愛（遺構）、宮嶋洋一（遺物）

DTP　　挿図トレース・レイアウト：伊藤　愛（遺構・焼物）・原田健司（石器）

写真図版作成・版組全般：伊藤　愛

5　図中で使用した方位は真北を示す。また遺構図中に示した国家座標値（世界測地系・第8系）は、東北太平洋沖地震後の補正値である。

6　調査から本書作成までの間、以下の方々から助言・協力を得た。

青木教司、青木たか、岩岡清子、岩岡道雄、水澤幸一、丸山依純、山田瑞穂（敬称略）

7　本調査の出土遺物および写真・実測図等の記録類は、松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館（〒390-0823 松本市中山3738-1　TEL0263-86-4710　FAX0263-86-9189）に保管している。

目　次

巻頭図版

例言・目次

第Ⅰ章　調査の経緯・・・5

第Ⅱ章　遺跡の環境

第1節　地形と地質・・・7

第2節　歴史的環境・・・8

第Ⅲ章　調査の結果

第1節　調査の方法・・・15

第2節　遺構・・15

第3節　遺物

1　焼物・・22

2　石器・石製品・・・24

3　金属製品・・・24

第Ⅳ章　調査のまとめ・・・26

写真図版

第Ⅰ章　調査の経緯

第１節　調査経過

1　調査に至る経過

岩岡館跡は、松本市梓川倭に所在する中世城館遺跡である。平成 25 年、松本市上下水道局により遺跡に近接する梓川倭字寺屋敷 1291 番地 1 内 1000 ㎡において梓川地区新水源地建設が計画された。対象地は岩岡館跡に接するため、松本市教育委員会は埋蔵文化財が所在した場合の保護策について水道局と協議し、試掘による事前確認が必要と判断した。そこで、平成 25 年 9 月 25 日付長野県教育委員会からの文化財保護法 94 条に係る通知により、市教委が 11 月 8 日～ 12 月 2 日に試掘調査を実施した。その結果、対象地北半部を中心に遺構・遺物が検出されたため、水源地建設に際しては本調査が必要との結論に至った。

平成 26 年、水源地建設が正式決定されたことを受け、市教委は建屋部分を中心に遺構の破壊が避けられないと判断し、水道局の委託により対象地北寄りの 208 ㎡について記録保存目的の発掘調査を実施することを決定した。調査は 5 月 7 日～ 6 月 14 日に行い中世の遺構・遺物を多数得た。調査終了後、6 月 13 日付で松本警察署あて埋蔵物発見届・県教委あて埋蔵物保管証を提出、続く 6 月 23 日付で県教委に終了届を提出した。その後、松本市立考古博物館において整理から本書の作成まで一連の作業を実施した。

なお、平成 17 年の合併後、梓川地区内における本格的な発掘調査はこれが初となる。そのため、発掘調査期間中の 6 月 7 日には地元南大妻地区住民を対象に現地説明会を開催し 50 名の参加を得た。また、公民館報への遺跡紹介記事掲載、速報展「発掘された松本 2014」への展示等、普及公開にも努めた。

第１図　岩岡館跡の位置

第２節　調査体制

調査団長	吉江　厚（松本市教育長）
調査担当	竹原　学（埋蔵文化財担当係長）、宮島義和（嘱託）、伊藤　愛（同）
報告書担当	竹原　学、原田健司、宮島義和、伊藤　愛
調　査　員	宮嶋洋一、森　義直
発掘協力者	島井和幸、長岩千晴、待井正和、矢野芳徳、矢満田伸子
整理協力者	佐々木正子、内田和子、村山牧枝
事　務　局	松本市教育委員会文化財課
	内城秀典（課長）、直井雅尚（埋蔵文化財担当係長）、櫻井　了（主査）、吉見寿美恵（嘱託）

検出作業

岩岡氏墓所

現地説明会

遺構調査

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　地形と地質

1　遺跡周辺の地形（第２図）

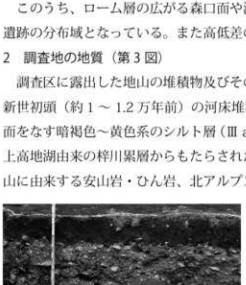
岩岡館跡は旧南安曇郡梓川村倭（南大妻）に所在し、松本盆地に流れ込む主要河川の一つで盆地西部を北東流する梓川が形成した広大な扇状地の扇央付近、標高 626.3m の平坦地に立地する遺跡である。梓川は扇状地の両岸に数段からなる河岸段丘を形成していることが知られているが、その構成は以下のとおりである。岩岡館跡は完新世初頭の形成になる丸田面の段丘崖近くに立地していることになる。

	左岸	右岸	
氾濫原	岩岡面	押出面	
段丘面１	丸田面　←岩岡館	上海渡面	ローム層なし（第四紀完新世）
段丘面２	（浸食？）	森口面	ローム層あり
段丘面３	上野面（焼山面）	波田面	ローム層あり

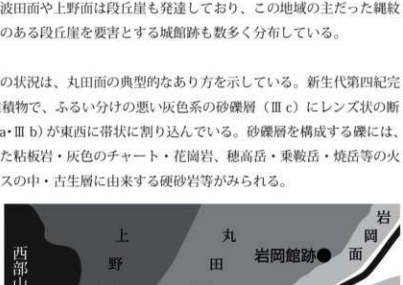
このうち、ローム層の広がる森口面や波田面や上野面は段丘崖も発達しており、この地域の主だった縄紋遺跡の分布域となっている。また高低差のある段丘崖を要害とする城館跡も数多く分布している。

2　調査地の地質（第３図）

調査区に露出した地山の堆積物及びその状況は、丸田面の典型的なあり方を示している。新生代第四紀完新世初頭（約１～ 1.2 万年前）の河床堆積物で、ふるい分けの悪い灰色系の砂礫層（Ⅲ c）にレンズ状の断面をなす暗褐色～黄色系のシルト層（Ⅲ a・Ⅲ b）が東西に帯状に割り込んでいる。砂礫層を構成する礫には、上高地湖由来の梓川累層からもたらされた粘板岩・灰色のチャート・花崗岩、穂高岳・乗鞍岳・焼岳等の火山に由来する安山岩・ひん岩、北アルプスの中・古生層に由来する硬砂岩等がみられる。



竪２の壁面に現れた砂礫層（Ⅲ c 層）



第２図　梓川左岸の河岸段丘

第３図　調査地の土層模式図

第２節　歴史的環境

1　岩岡館跡と周辺の城館跡

(1)　岩岡館跡と周辺の地割（第４図）

第４図は昭和62年に行われたほ場整備以前の岩岡館周辺の地籍図である。今回の調査地の北側に接して、周囲を水路で囲まれたやや北北東に傾く四角い地割がみえるが、その中には「内堀」という小字が残ることから、水路は古くは堀であったことが窺える。またこの地割に接するように「家裏」「屋敷添」といった小字がみられ、ここが周囲を方形の堀で囲まれた居館跡（方形館）であったものと推定される。規模は約 50m（およそ半丁）四方である。周辺には岩岡姓が多く、この方形館が岩岡氏の館跡であるといわれてきた。

館跡の南に接し「寺屋敷」の小字が残り、その一部が今回の調査地である。館に関連する寺院等があった可能性がある。寺屋敷の南には横沢堰が流れ、堰南側の段丘崖に面して岩岡家墓地がある（6ページ写真参照）。墓地には中世の石塔はみられないが、「ゴセンゾサマ」と呼ばれる低いマウンド状の礫の集石３基があり、古い墓ではないかと注目される。

(2)　梓川地区の城館跡（第４図）

梓川地区には多くの城館跡がある。その立地は大きく①段丘内陸にあるもの、②段丘崖に面するかそれに近い位置にあるもの、③山腹にあるものに分けられる。①は上野面の本神沢砦 (4) と於田屋館 (9) の２カ所、丸田面の大妻氏館 (18) が該当する。②は上野面東段丘に面した坂の上砦 (5)・伊藤坂上砦 (7)・西林砦 (10)・桜坂上砦 (12)・柳坂上砦 (13)・荒海渡砦 (14)・中村館 (15)・長坂上砦 (16) そしてやや離れて長尾城 (20) がある。また北を流れる黒沢川段丘上に尖屋敷がある。丸田面には岩岡館 (1)・氷室館 (19) があり、最も下段の岩岡面に城館跡はみられない。③は西方の山腹に造られた山城で、中塔城 (2)・北条城 (6)・亀山城 (8)・田屋城 (11)・鞠子山砦 (17) がある。

上野面の館や砦と山城群を関連づけて「西牧氏城館址」と捉えられている（『南安曇郡誌』歴史編上）。西牧氏は滋野氏の一族で、古代この地に馬の牧を経営し、中世においては梓川一帯に勢力を持っていたとされる。武士化するにあたって於田屋館を本館、北条城を本城、中塔城を詰めの城とし、段丘上に配列する砦群を縁辺の守りとするという図式となったようである。於田屋館から西北の山城山麓に若宮社があり、参道が続いている。さらに若宮社の北に嶺城山本願寺跡がある。平地に居館、背面の山の麓に信仰空間そして本城に達するという景観になる。また本神沢砦は於田屋館の「丑寅のやぐら」と言われたそうだが、『南安曇郡誌』掲載の地割をみると南東に振れた長方形の堀の痕跡が確認でき、方形館であった可能性が高い。

段丘縁辺部の砦群は断崖を堀にみたて自然の要害としているが、西林砦のみ段丘の縁辺に沿った堀があり、方形状に区画された小曲輪がみられる。荒海渡砦は昭和 53 年に発掘調査され（梓川村教育委員会 1978『荒海渡遺跡発掘調査報告書』）、空堀や礎石列が検出されている。段丘上縁辺部には集落をつなぐ古道があったといわれるが、それに沿って山麓中央の鞠子八幡社前に至り、さらに西へ通じる千国街道（仁科街道）と呼ばれる横道があるとされ、仁科地方と飛騨・木曽地方を結んだ道の名残と言われる。

北条城は東西３郭に分かれ、東の不整五角形の曲輪が一段高い地形となり、東北部と西部に大きな堀がある。中塔城は天文 19 年（1550）に林城を追われた小笠原長時が家臣とともに篭城したとされる（『増補二木家記』）。また、天正 10 年（1582）に岩岡氏が篭ったとされるが後述する。主郭は東西 50m、南北 10m と小さいが、その西に東西 100m、南北 50 m の窪地がある。鉄製の茶釜と染付皿が出土している。

丸田面の大妻館跡は北大妻から南大妻に通じる道と県道に囲まれた、東西 140m、南北 162m の範囲を館跡としている（『梓川村誌』）。堀屋敷という小字が多くあり、堀で区画された館の可能性がある。付近に

1 岩岡館
2 中塔城
3 尖屋敷
4 本神沢端砦
5 城の上砦
6 北条城
7 伊藤坂上砦
8 亀山城
9 於田屋館
10 西林砦
11 田屋城
12 桜坂上砦
13 柳坂上砦
14 荒海渡砦
15 中村館
16 長坂上砦
17 鞠子山砦
18 大妻氏館
19 氷室館
20 長尾城（安曇野市）

第４図　岩岡館跡周辺の地割と梓川地区の城館跡

は「まんどころ」という小字もある。『承久記』に大妻兼澄の名が見え、承久の乱では後鳥羽上皇側で戦ったという。

2　岩岡氏と中世の梓川

天文14年（1545）5月、諏訪における小笠原長時と武田晴信の合戦について『笠系大成』及び笠系大成附録の『岩岡家記』『増補二木家記』に記録がある（史料1・2・3）。しかし『高白斎記』には同様の記録はなく、同年6月に小笠原の館に放火をしたことが記されている（史料4）。小笠原方の記録にみられる諏訪峠の戦いは、『高白斎記』に記された天文17年（1548）の塩尻峠（勝弦峠）の戦いを示しているとされる（史料5）。この時、岩岡石見という人物が戦死したことを『笠系大成』『岩岡家記』は伝えている。これが岩岡氏の初見である。『岩岡家記』には岩岡石見が拙者（岩岡織部）の祖父であると書かれている（史料2）。以下この3つの史料をよりどころにして岩岡氏と梓川を取り巻く時代の状況をみていきたい。

岩岡氏の記録は岩岡石見の戦死記事から始まるため、その出自は分からない。しかし、小笠原長時の家臣であったことが『笠系大成』には書かれている（史料1）。小笠原氏は室町時代から住吉庄の地頭として安曇に力を広げていった。その過程で安曇一帯を抑え、在地の武士を被官化していったようだ。梓川には古代から勢力をもっていた西牧氏がいて、その力は次第に衰え小笠原長時の被官となるが、塩尻峠の戦いで叛逆し（史料1）武田方につく。同様に小笠原長時が武田晴信に敗れ没落して以降、小笠原の被官たちも武田氏に属していた。岩岡氏も同様であるが、武田配下としての動きについて『岩岡家記』には全く記されていないため、その立場や領地についての情報がない。この間の岩岡氏の足跡を追う唯一の手がかりは天正7年（1579）『下宮春宮造宮帳』である。これは信濃各地の荘園（郷）へ諏訪大社春宮の祭祀執行の負担金を割り当てたもので、その中に住吉郷が出てくる。そこに18の郷村が列記されているが岩岡は出てこない。岩岡館跡のある大妻南方（南大妻）の代官は松島孫右衛門尉となっている。ただ寺所の代官に「織部」の名がみられる（史料6）。これを岩岡織部とする根拠はないが、年代的には合致している。寺所は寄付金が8貫文と非常に高く3人の代官によって賄われている。大妻南方は1貫460文、大妻北方は1貫400文で、代官はそれぞれ1人である。もし「織部」が岩岡織部とすれば、武田氏支配当時は寺所（南穂高）に領地を給付されていた可能性がある。このように梓川の郷村は天正7年の段階ではまだ武田勝頼のもとで諏訪大社の祭祀のために奉仕をしていた様子がみてとれる。

しかし岩岡佐渡・織部父子は天正10年（1582）3月には武田勝頼を見限り、隣郷の衆を引き付けて梓川の中洞山（中塔城）に篭ったとされる（史料7）。文中の「御本意を願申す」とは小笠原長時の勢力を回復することであろう。木曽義昌はすでに武田を見限り、織田信長に付いていた。旧小笠原勢も一旦は木曽氏に従ったようだ（史料8）。そのような時長時の息子貞慶が飛騨を越えて信濃に入り梓川の金松寺に逗留する（史料9）。これを聞いた小笠原の旧臣はすぐにお目見えをしたようで（史料9）、岩岡佐渡守は駿馬2匹を進上するなど貞慶復帰の喜びを表すなど、彼らは再び結束を固めていく。しかし深志城および筑摩・安曇の2郡を織田信長に安堵してもらう願いはかなわず、木曽義昌に与えられてしまう。その結果貞慶は信濃を離れ京都に赴く。ところが本能寺の変により大きく事態が変わってくる。深志城には越後の上杉景勝に身を寄せていた貞慶の伯父洞雪斎が入城する（史料10）。しかし実態は後見役の越後勢の言いなりという状況であった。そこで旧小笠原勢は深志城を奪還し貞慶を迎え入れる（史料11）。以後深志城は松本城と呼ぶようになる。また筑摩・安曇両郡も回復したようで、深志城奪還後の知行割が行われ、岩岡織部は梓川の「岩岡100貫」の地を宛がわれた（史料11）。これによって岩岡織部も小笠原貞慶の給人となった。つまり岩岡に100貫文の生産地盤を与えられ、そこから得られる収入から貞慶に対して軍役を果たすということである。ここで100貫という領地を他の給人と比較してみると、例えばこの後小笠原貞慶の側近となる犬甘官左衛門には

本領として 900 貫の領地を遣わしている（史料 12）。織部の実に 9 倍である。逆に織部の約 4 分の 1 の給人もいる（史料 13）。軍功などによって恩賞に差があることがわかる。

その後貞慶は会田・青柳・麻績・日岐といった領内の反勢力を排除するとともに伊那や木曽にも目を向けていく。『笠系大成』では各所に岩岡織部の活躍の記述がみられる（史料 14）。また岩岡沼兵衛・岩岡七太夫といった名もみられ、それぞれ合戦に参加している。岩岡氏は特に戦国時代後期から末期に中心に、時には主を変えながらも生き延びてきた典型的な在地領主の一族だったと言えるだろう。

以上岩岡氏についての記述がある『笠系大成』『増補二木家記』『岩岡家記』3 点の史料に基づいて述べてきたが、これらは慶長期以降に筆記されたものであり、特に『笠系大成』は享保 17 年（1733）に補筆がなされている。よって事実関係や年代等に齟齬や誇張があることは否めない。なお、『梓川村誌』に引用されている「天文三甲午年小笠原家譜代の家臣分限帳」に「旗本鑓備衆十九家」の 1 人として「一　高百七十貫文　岩岡佐渡　拾騎」という記述があるとするが、この分限帳の所在を確認することができなかった。もし正当な史料とすれば岩岡佐渡が 1534 年の段階で軍役を勤めていたことになる。また岩岡佐渡を宇留賀北山城主であったとする説もある（『南安曇郡誌』大正 12 年刊）。今後出典を明確にする必要がある。

最後に岩岡についての史料として文書が 1 点残っており、それを紹介する（史料 15）。これは小笠原貞慶が梓川において検地を行った史料と推定できる。「岩岡の見出四拾俵」というのは、検地の結果、以前の収穫高より 40 俵多かったことを示す。これを「検地増分」というが、杏の見出 30 俵を合わせて銭に換算し 14 貫文分を加恩として平林彌衛門に与えている。梓川における貞慶の支配も定着していた様子が窺える。

岩岡氏の館は周辺に岩岡姓が多いこと、また岩岡家墓地の存在することなどからその場所が言い伝えられてきた。しかしこの館については文献資料が全くなく、また考古学的調査も行われていないため断定するには及んでいない。今後も慎重に調査していく必要があるだろう。

（史料 1）『笠系大成』長時　天文 14 年 5 月　（『新編信濃史料叢書』第 12 巻 P148）

長時旗本をもって晴信の本陣襲撃す。晴信既に危うき時、西牧・三村その勢千四百騎叛逆して御陣の峠において鯨波を挙げる。長時反って叛氏を討つに備え、西牧・三村敗軍一傍を開く。長時直ちに兵を揚げて退き塩尻永井坂に還る。敵また慕来す。ここにおいてまた奮戦し首数多を得るなり。然るに長時の土栗原飛騨守・小宮山主税・三溝三右衛門・岩岡石見等士卒多く戦死す。長時漸く遁れ林城に還る。

（史料 2）『岩岡家記』天文巳（14 年）5 月　（『新編信濃史料叢書』第 8 巻 P105）

天文巳五月、長時公信玄公と御取合せの時、諏訪峠において岩岡石見討死仕り候。これは拙者の祖父にてござ候。

（史料 3）『増補　二木家記』天文 14 年 5 月

夜明けに候て諏訪峠に御陣取りをなされ、天文十四年乙巳五月二十三日辰の剋軍始り、初合戦に春信公の先手を切り崩し、よつ屋まで敵を負い下し、首百五十余を長時公の方へ御取りなられ候。

（史料 4）『高白斎記』天文 14 年 6 月　（『新編信濃史料叢書』第 8 巻 P36）

十四日林近所まで放火。桔梗原御陣所、熊野井の城自落。子の刻十五打ち立て、小笠原の館放火。六月十五日桔梗原において勝閧。十六日御帰陣、十七日御着府。

（史料 5）『高白斎記』天文 17 年 7 月　（『新編信濃史料叢書』第 8 巻 P39）

翌十九日卯の刻塩尻峠たてこもり、小笠原長時責め破り、数多討ち捕りなされ候。

（史料 6）『下宮春宮造宮帳』天正 7 年 5 月　（『信濃史料』第 14 巻 P 387）

寺所分

但馬

正物八貫　　代官　織部

源右衛門尉

（史料 7）『岩岡家記』天正 10 年 2 月　（『新編信濃史料叢書』第 8 巻 P105）

岩岡佐渡・同拙者が甲州方深志を引き切り、隣郷の衆を引きつけ申し、中洞山に取り篭り候奥意は御本意を願申すによての儀に候

(史料 8)『笠系大成』貞慶　天正 10 年正月　(『新編信濃史料叢書』第 12 巻 P165)

天正十年正月、武田左馬助信豊・仁科五郎守信等をして木曽城に向かわしむ。義昌征矢野鎌田諸軍を出張し、時に小笠原被官古幡伯耆守・岩波平左衛門・本忠・西牧又兵衛・岩岡織部等、一旦武田に属すといえども、この時に至り武田を叛く。信州に在りて武功によりその聞こえあり。義昌密に渠（彼）等を招き軍議をなす。この時に当たり小笠原家士武田に属す者多くを以て甲州に叛き義昌に加勢す。

(史料 9)『岩岡家記』天正 10 年 3 月　(『新編信濃史料叢書』第 8 巻 P106)

一　同三月、貞慶公飛騨通りをお忍びなられ、西牧金松寺へ御着きなされ、両郡御譜代衆・二木衆お尋ねなされ、中洞小屋へ犬甘主馬助・滝沢両人をお使いに遣わされ候。すなわち小屋の者ども金松寺へ参りお目見え候。

(史料 10)『増補二木家記』天正 10 年 6 月　(『新編信濃史料叢書』第 8 巻 P 87

織田信長公御自害に付き、同年（1582）6 月に諸国乱世にまかりなり候。然るに木曽殿の仕置き悪しくござ候ゆえ、両郡の武士一味して木曽殿を追い出し申し、越後に小笠原洞雪公ござ候を、景勝より梶田・八代両人の物頭に、侍二百騎指し添えられ、深志の城に洞雪公がお越しになられ候。

(史料 11)『岩岡家記』天正 10 年 7 月　(『新編信濃史料叢書』第 8 巻 P107 ～ 108)

百騎ばかりにて深志に御着きになられ候事は同日の八ツ時分にてござ候。それより城へ取りかけ、翌日の四ツ時分まで競り合い、双方手負いの数多くござ候。その上扱いに成され、洞雪様をば越後へ送り申し候に付きて、二木一類並びに拙者共も七月十九日二十日に妻子を深志へ移し申し、その上万事御仕置きになられ、方々口々御人数を遣わされ、その上知行割あそばされ、二木一類その外にも御奉公申し候衆に御知行下され候。拙者共にも岩岡百貫の所下され候事。

(史料 12)「御證文衆」(笠系大成附録) 天正 10 年 8 月　(『信濃史料』第 15 巻 P 370)

「本書折紙　御自筆」(朱書)

犬甘四百貫文、北方三百貫文、蟻崎百貫文、青嶋百貫文

右合わせ本領九百貫文の所出し置き候。この旨をもって忠節抽んずべきものなり。仍て件の如し。

天正壬午十年

八月三日　　貞慶（花押）

犬甘官左衛門殿

(史料 13)「桃井文書」天正 10 年 7 月　(『信濃史料』第 15 巻 P357)

花押（小笠原貞慶）

村井之郷の内定納二十五貫文の所出し置き候ひおわんぬ。この旨を以て、自今以後忠勲を抽んずべきもの也仍て件のごとし

天正十壬午

七月二十八日

平出主計佑

(史料 14)『笠系大成』貞慶　天正 10 年 8 月　(『新編信濃史料叢書』第 12 巻 P168)

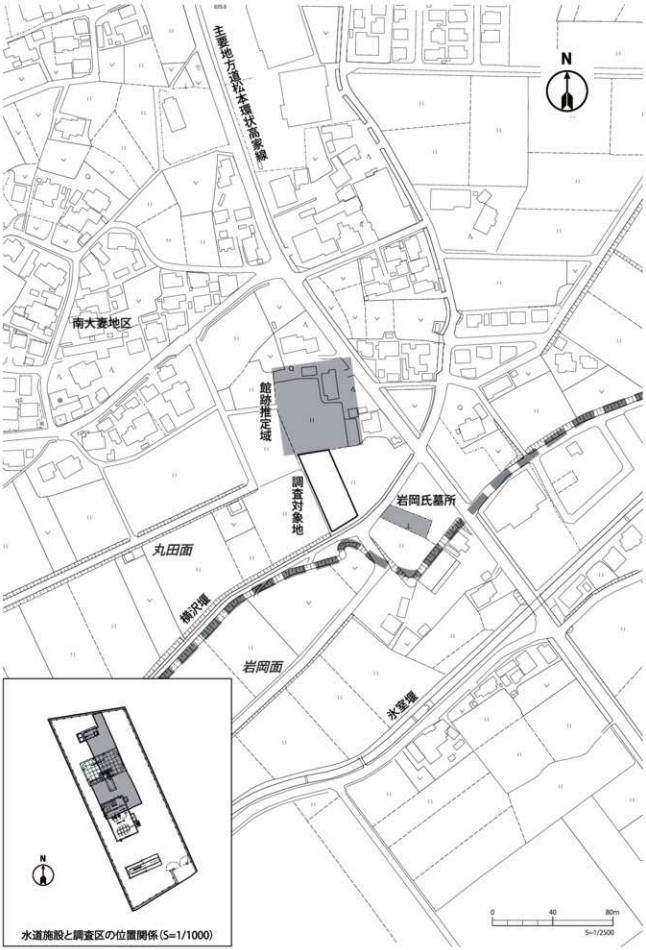
日岐群士東原口へ出張す（按ずるに塔原口か、）衆士松本を発してこれを撃つ。穂刈監物・川船治左衛門・岩岡織部先登を進む。赤岩山で敵に会い、穂刈疵を被る。川船槍疵を得る。岩岡織部奮戦し敵を払う。

(史料 15)『御判物集』(『信濃史料』第 16 巻 P546)

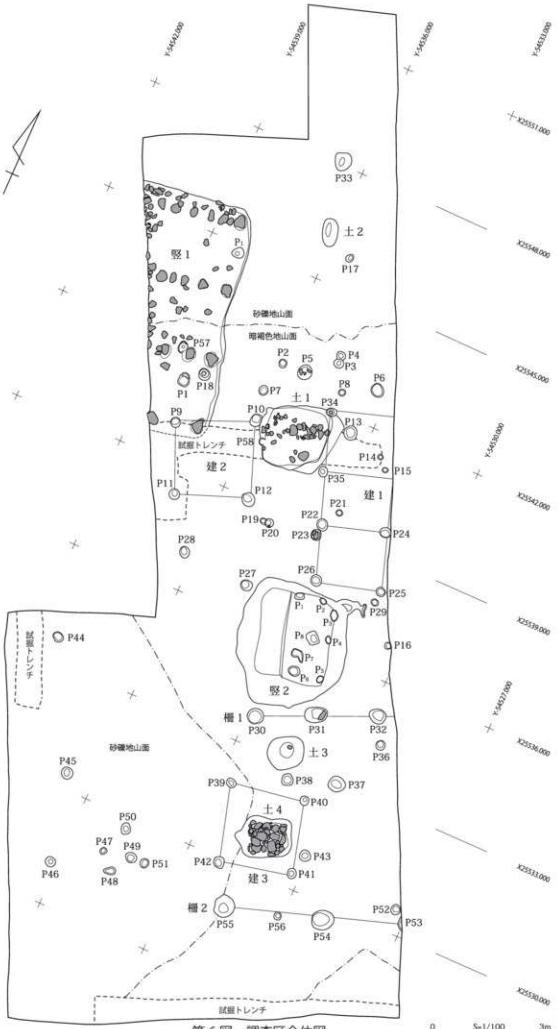
加恩として、岩岡の見出四拾俵・杏の見出三十俵合わせ十四貫文遣わし候。いよいよ奉公により重恩なすべきものなり。仍て件の如し。

天正十六戊子九月二十七日　　貞慶　判

平林彌右衛門殿



第 5 図　調査地の位置と周辺の地形


Y-34542.000
Y-34539.000
Y-34536.000
Y-34533.000
X-25551.000
X-25548.000
X-25545.000
X-25542.000
X-25539.000
X-25536.000
X-25533.000
X-25531.000
X-25524.000
X-25530.000
Y-34527.000
Y-34526.000
33
土2
17
竪1
1
砂礫地山面
暗褐色地山面
57
18
1
2
5
4
3
6
8
7
土1
34
9
10
13
58
試掘トレンチ
建2
14
15
35
建1
11
12
21
22
19
20
23
24
28
27
26
25
29
試掘トレンチ
44
16
竪2
柵1
30
31
32
36
砂礫地山面
45
土3
39
38
37
40
50
土4
47
49
43
46
51
42
48
建3
41
柵2
52
53
55
56
54
試掘トレンチ
0
S=1/100
3m

第６図　調査区全体図

第Ⅲ章　調査の結果

第１節　調査の方法

調査開始にあたって、試掘結果及び設計図面に基づき用地北寄りに南北 26.7m・東西 10.2m の調査区を設定した。最初に遺構検出面となる地山層直上まで重機で表土を除去した後、遺構検出作業を経て各遺構の調査に着手、掘り下げ・写真記録・図面記録・遺物取り上げ等の作業を行った後、調査区を埋戻し旧状に復した。遺構測量に係る基準は国家座標（世界測地系第８系）を用いたが、周辺に既知点がないため測量業者に委託して敷地近辺に３級基準点を２点設けた。その他、岩岡氏に係る文献調査等も並行して実施した。

今回の調査成果は下表のとおりである。若干の遺物を除き遺構はすべて中世に帰属する。また調査区内は平坦な面をなすが、調査範囲では人為的な整地土層や、岩岡館跡を囲む堀等の遺構は認められなかった。

第２表　調査成果一覧

調査期間	平成 26 年５月７日～６月 14 日	調査面積	208 ㎡
検出遺構		出土遺物	
竪穴建物跡２基　掘立柱建物跡３基　土坑４基、柵列２基、ピット 38 基		平安：灰釉陶器（碗） 中世：土師質土器（皿・内耳鍋）, 青磁（碗）、 石器・石製品（凹石・敲石・石鉢他）、金属製品（銭）	

第２節　遺構

１　竪穴建物跡（第２表、第７図）

竪穴建物１　調査区北西に位置し、現地表下 20 ～ 25 ㎝で検出した。規模は南北 6.3 m、東西は現存値で 2.9 mを測り、西調査区外へと続く方形ないし長方形を呈する遺構である。南北軸方位は N － 11°－ W で、深度は 20 ㎝と浅い。地山の暗褐色シルト層（以下Ⅲａ層）と砂礫層（以下Ⅲｃ層）の境界に存するため、底面の北半は砂礫層、南半はシルト質の暗褐色土層となり、硬化面はみられない。付随施設としては北東隅に 32 × 28 ㎝の不整形の P_1 があるが、P1・9・18・57 は、本遺構よりも後に構築されたものと考えられる。この遺構の特徴的な点は、礎石を伴う竪穴建物であることである。礎石は南北３間 × 東西２間以上、柱間寸法は南北 184.7 ㎝（6.1 尺）、東西は 177.2 ㎝（5.8 尺）を測る。近隣の河原から採取されたと思われる花崗岩等の扁平な礫を埋め込んだもので、大きさは 30 ～ 40 ㎝。深さ 10 ㎝程度の掘り方も確認できた。東西方向の礎石間には、亜円礫を２～３個並べた石列がみられる。大きさは 25 ～ 30 ㎝ほどで、礎石よりも小さな礫を用いている。配列間隔は一定ではない。以上のように硬化面が無いことや礎石や石列が存することから、この遺構は土間のような直床式ではなく、上げ床式の建物であると推測できる。また、礎石には高低差がみられ、外周部の S1 ～ S4 はレベルが低く、中央部の S5 ～ S7 は高く据えられる。石列は礎石よりも５～ 10 ㎝高く配されており、S5 ～ S7 と上面レベルがほぼ同じである。

これらの点を踏まえると、この建物は次のような構造が１つの復元案として想定できる。まず、一番レベルが低い東壁沿いの S1 ～ S4 の上に角材あるいは板材を横たえ、その上に東西の礎石・石列上にも角材や板材を渡すと、基礎となる土台組が目の字状に出来上がる。その後礎石位置の土台上に主柱を立て、東西土台の南北間に根太を渡して床板を張る。また、同時に主柱間にも壁を張る。以上のような工程を経て、上屋が構築されたと推測される。蔵などの収納を目的とした建物と考えられるが、遺物の出土はない。

竪穴建物２　調査区中央部に位置する。底面は南北 2.25 m × 東西 1.9 mの隅丸方形を呈するが、検出面では南北 3.3 m×東西 2.9 mの不整楕円形となる。深度は 1.4 mで、Ⅲａ層から掘り込まれる。南北軸の

方位はN－15°－Wにとる。覆土には礫が多量に入り、下層ほど粗い砂礫質で崩れやすい。壁面は検出面から20㎝までの上層のみⅢa層で、そこから下層はⅢc層になる。断面形をみると、南側は斜めに立ち上がるのに対し、北側は直に近い。Ⅲc層で構成される壁は脆く崩落する恐れがあるため、当然のことながら本遺構機能時は壁が露出していたのではなく、土壁の内側には板壁が築かれていたと考えられる。底面も壁面と同様砂礫土の中にあるが、中央部を中心に褐色土が貼られている。そのため、この遺構は土間床であったことが推測できるが、顕著な硬化はみられない。付随する施設としては、P_1～P_8が検出されている。P_1～P_5は直径20～30㎝ほどで、深さは5～10㎝と浅いが、壁際に並ぶため柱穴の可能性がある。P_8は直径35㎝・深さ10㎝を測り、底面中央からやや東寄りの位置にある。覆土に焼土や炭塊を含むことから、炉の可能性もある。なお、西半部は床面を抜いてしまったため、付随施設を確認することができなかった。本遺構の覆土上層からは、内耳鍋（3～6）や土師質皿（1）、青磁碗（2）等の焼物のほか、凹石（1）や石鉢（8）などの石製品が出土している。竪1と同様、倉庫のような収納施設であったと考えられる。

2　掘立柱建物跡（第2表、第7図）

掘立柱建物1　調査区中央の東寄りに位置し、南北3間×東西2間以上で東調査区外に続く。柱間寸法は南北1.5 m（5尺）×東西1.65 m（5.5尺）、南北軸をN－19°－Wにとる総柱建物である。柱穴は長径30㎝前後の円形で、深度は30～40㎝。断面はU字状で、柱痕が残るものもある。P30では、柱材の一部と思われる木片が残存していた。Ⅲa層から掘り込まれ、黄色地山層（以下Ⅲb層）にまで達する。

掘立柱建物2　調査区中央部に位置し、1間四方の小型建物である。柱間寸法は南北1.95 m（6.5尺）×東西1.95 m（6.5尺）、南北軸はN－23°－Wにとる。柱穴はⅢa層から掘り込まれてⅢb層に到達する長径30～40㎝の円形ピットで、深度は20～40㎝と差がある。20㎝前後の浅い柱穴は断面が不整形や逆台形で、深度40㎝前後のものはU字状を呈し、柱痕を残すものもある。遺物の出土はない。

掘立柱建物3　調査区南部のⅢa層とⅢc層の境界に位置し、南北1間×東西1間のやや不整な方形を呈する建物跡である。南北軸はN－16°－Wで竪2とほぼ同じ軸をとる。柱間寸法は1.95 m（6.5尺）×1.95 m（6.5尺）。柱穴は浅く6～10㎝の断面皿状に掘り込まれ、いずれも円形を呈する。柱痕はみられない。付随施設として土坑4があり、柱穴がこの土坑を囲むように配置されていることから、本遺構は土坑4を屋内に収めるための建物として構築されたと考えられる。土坑4の詳細ついては後述する。

3　柵列（第2表、第8図）

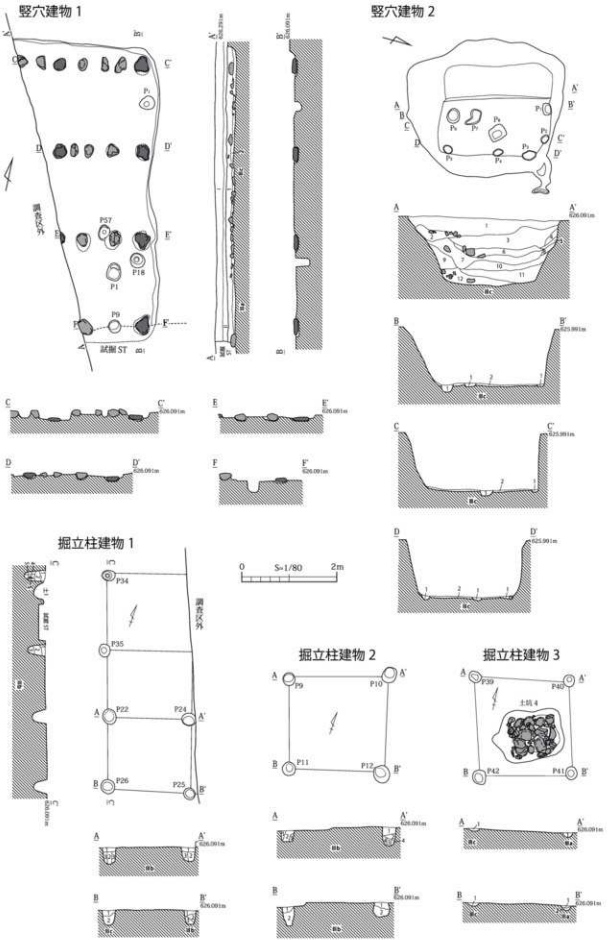
柵列1　調査区南東に所在する。東西2間以上で、調査区の東に続くと考えられる。柱間寸法は1.65 m（5.5尺）で、東西軸はN－66°－E。柱穴の直径は20㎝～30㎝、深度は10～20㎝である。柱痕はみられない。

柵列2　調査区南部に位置し、東部は調査区外へ続く。東西2間以上で柱間寸法はP54～55間が2.6 m、東西軸はN－71°－Eにとる。柱穴の規模は長径30㎝、深度は20～30㎝を測る。柱痕や遺物はみられない。

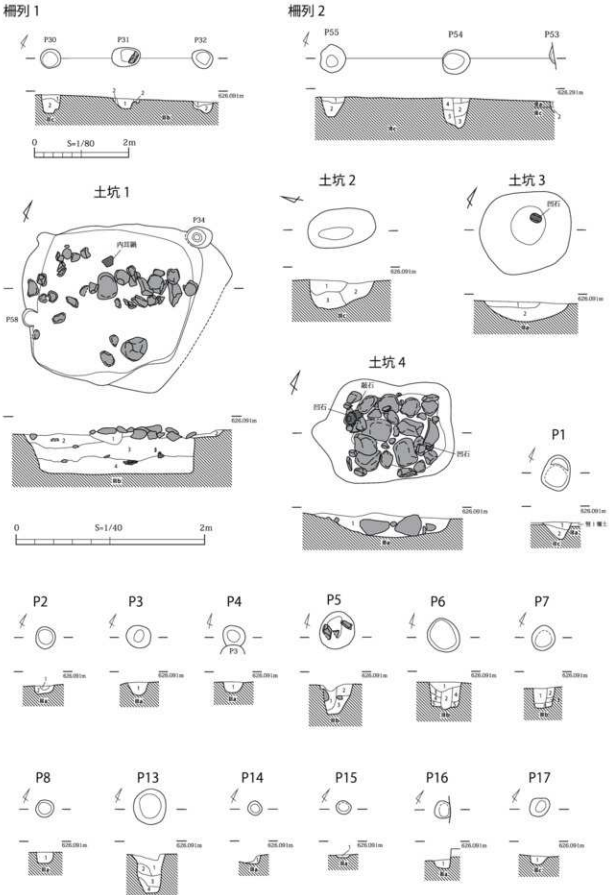
4　土坑（第2表、第8図）

土坑1　調査区中央部に位置し、南北3.5 m、東西4.4 mの隅丸長方形を呈する遺構である。東西軸はN－61°－Eで、竪2と向きを揃える。Ⅲa層から掘り込まれ、底面はⅢb層の黄色層を平坦に成形しており、やや硬化がみられる。深度は40㎝で、壁はほぼ直に立ち上がる。東側上部に浅い掘り込みがみられ、その南部覆土からは焼土が検出されている。覆土は上層と下層でやや様相が異なり、上層は黄褐色で粘性の弱い土であるのに対し、下層は粘性の強いオリーブ褐色の極細粒砂であった。覆土上面からは拳～人頭大の礫が東西に列状に検出された。礫群のレベルは、遺構東側の浅い掘り込みとほぼ同じである。覆土の第4層直上から上部では、内耳鍋1個体分の破片が散在して出土した（7）。付随施設はなく、建1（P34）とP58は本遺構より後の遺構と考えられる。土間床を有しており、何らかの貯蔵施設である可能性が高い。

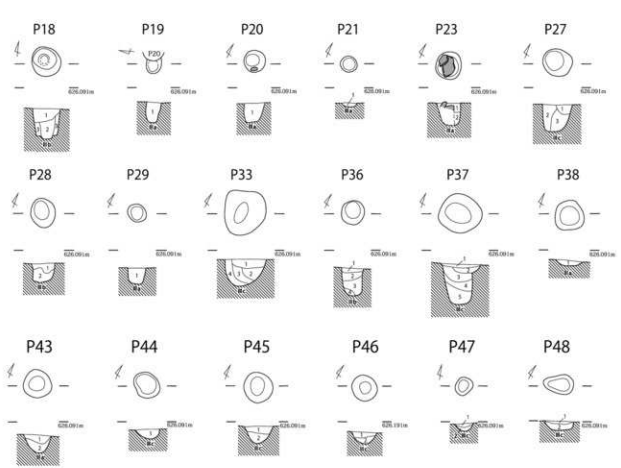
土坑2　調査区北部に位置する長径75㎝、短径40㎝、深度30㎝の楕円形土坑である。Ⅲc層に掘り込



第 7 図　検出遺構（1）


柵列 1
P30
P31
P32
626.091m
0
S=1/80
2m
柵列 2
P55
P54
P53
土坑 1
P34
P58
内面鋼
0
S=1/40
2m
土坑 2
土坑 3
浮石
土坑 4
浮石
P1
第 1 層土
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P13
P14
P15
P16
P17

第 8 図　検出遺構（2）



第 9 図　検出遺構（3）

まれており、遺物の出土はない。

土坑 3　調査区南部に存する土坑で、長径 95 ㎝、短径 85 ㎝を測り平面円形を呈する。断面は浅い皿状で、深度は 20 ㎝。底面からは凹石（3）が出土している。

土坑 4　調査区南部のⅢ a 層から掘り込まれる遺構である。南北 1.10 m、東西 1.50 mの隅丸長方形を呈し、西中央部が突出している。深度 22 ㎝ほどの坑内には、川原石を南北約 1.0 m、東西約 90 ㎝の範囲に長方形に敷き詰めており、30 ㎝ほどの大礫の隙間に 15 ～ 20 ㎝大の小礫を詰めるように配されていた。この礫群の中から、凹石（4･5）や敲石（6）が出土している。付随施設としては、先に挙げた掘立柱建物 3 がある。

5　ピット（第 2 表、第 8 ～ 9 図）

本遺構で検出されたピットは、掘立柱建物や柵列に属するものを除くと 38 基になる。規模は 15 ～ 45 ㎝に及び、平面形は総じて円形である。深度は 4 ～ 40 ㎝、断面形態は U 字形や逆台形を呈する。全体的にⅢ a 層の範囲に分布する傾向がある。これは、ピットを含め建物の築造にあたってある程度の選地がなされたためと考えられる。なお、Ⅲ c 層中のピットは浅く、Ⅲ a・Ⅲ b 層に構築されたピットは、比較的深く掘り込まれている。今回検出されたうちの 4 基からは柱痕が確認され、柱穴とみられるが、配列は捉えられない。P3・13・24・55 からは、内耳鍋や皿などの土師質土器が出土した。

第２表　土層一覧表

遺構	土層No.	土色	色	土質	しまり	粘性	含有物	備考
竪穴建物１								
覆土	1	10YR5/3	にぶい黄褐色	極細砂	強い	弱い	黄褐色土粒子～塊 50%、褐色土粒子～塊 3%、白色土粒子 7%、炭粒子～塊 2%、φ 30～50mm 大礫 3%、こぶし大礫 2%含む。	
	2	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊 3%、明褐色土粒子 2%、褐色土粒子～塊 10%、炭粒子～塊 7%、φ 10～30mm 大礫 3%含む。	
竪穴建物２								
覆土	1	10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	かなり強い	弱い	黄褐色土粒子～塊 2%、褐色土粒子～塊 10%、灰白色土粒子～塊 7%、炭粒子～塊 7%、φ 5～10mm 大礫 15%、φ 10～30mm 大礫 5%、φ～50mm 大礫 3%含む。	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子 7%、明褐色土粒子 2%、褐色土粒子～塊 10%、炭粒子～塊 5%、φ 10～30mm 大礫 2%、こぶし大礫 5%含む。	
	3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	粗砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊 2%、黒色土粒子 7%、炭粒子 5%、φ 10～30mm 大礫 10%、φ 50mm 大礫 7%、瑠璃多量に含む。	
	4	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子 2%、明褐色土粒子 7%、褐色土粒子～塊 15%、瑠璃 1%含む。	
	5	10YR3/3	暗褐色	細粒砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊 1%、明褐色土粒子～塊 2%、炭粒子～塊 2%、φ 30mm 大礫 1%含む。	
	6	10YR4/3	にぶい黄褐色	中粒砂	やや弱め	強い	黄褐色土粒子 3%、明褐色土粒子 5%、褐色土粒子～塊 1%、炭粒子～塊 2%、φ 50mm 大の礫 10%、こぶし大の礫 2%含む。	
	7	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	細粒砂	やや弱め	あり	黄褐色土粒子～塊 5%、明褐色土粒子～塊 3%、褐色土粒子～塊 2%、炭粒子～塊 2%、φ 10～30mm 大礫 3%、こぶし大礫 2%含む。	
	8	10YR4/4	褐色	極細砂	あり	やや弱め	黄褐色土粒子 2%、炭粒子～塊 3%、φ 10mm 大礫 2%、φ 50mm 大礫 1%含む。	
	9	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	中粒砂	弱い	弱い	黄褐色土粒子 5%、褐色土粒子～塊 2%、炭粒子～塊 5%、φ 10～20mm 大礫 5%含む。	
	10	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊 7%、明褐色土粒子～塊 5%、褐色土粒子～塊 3%、炭粒子～塊 5%、φ 10～30mm 大礫 3%、φ 50mm 大礫 2%含む。	
	11	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	中粒砂	弱い	やや弱め	黄褐色土粒子～塊 10%、明褐色土粒子 2%、炭粒子～塊 2%、φ 10～30mm 大礫 30%、こぶし大礫 5%含む。	礫層
	12	10YR3/3	暗褐色	細粒砂＋粗粒砂	弱い	強い	黄褐色土粒子～塊 2%、明褐色土粒子 2%、黄灰色土塊 3%、φ 10～30mm 大礫 25%、こぶし大礫 3%含む。	
	13	10YR4/2	灰黄褐色土	細粒砂	あり	やや弱め	黄褐色土粒子 5%、明褐色土粒子 3%、φ 10～30mm 大礫 50%、φ 50mm 大礫 10%、こぶし大～人頭大礫 5%含む。	砂礫堆山層 c と同一組か。
P1	1	10YR4/4	褐色土	細粒砂	ほとんどなし	ほとんどなし	黄褐色土粒子 2%、炭粒子 1%、φ 10～30mm 大礫 1%含む。	
	2	10YR3/4	暗褐色	シルト	強い	強い	黄褐色土粒子～塊 5%、明褐色土粒子～塊 10%、炭黄色土塊 30%、黒色土粒子～塊 5%、灰白色土粒子～塊 2%、φ 30～50mm 大礫 5%含む。	堅之の貼り床。厚さ 2cm。
P2	1	竪 2P1 の 1 層目に相当						
	2	竪 2P1 の 2 層目に相当						
P3	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	極細砂	強い	強い	黄褐色土粒子 7%、炭粒子 3%、φ 10mm 大礫 2%含む。	
	2	竪 2P1 の 2 層目に相当						
P4	1	竪 2P3 の 1 層目に相当						
	2	竪 2P1 の 2 層目に相当						
P5	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	かなり強い	弱い	明褐色土粒子～塊 3%、褐色土粒子～塊 5%、炭粒子～塊 2%、φ 10mm 大礫微量含む。	
	2	竪 2P1 の 2 層目に相当						
P6	1	竪 2P5 の 1 層目に相当						
	2	竪 2P1 の 2 層目に相当						
P7	1	竪 2P3 の 1 層目に相当						
	2	竪 2P1 の 2 層目に相当						
P8	1	7.5YR3/4	暗褐色	シルト	強い	強い	灰白色土粒子～塊 5%、炭粒子～塊 10%、φ 10mm 大礫 1%含む。	焼土ピット。炉（いろり）跡か。
	2	竪 2P1 の 2 層目に相当						
土　坑								
土坑 1	1	10YR3/4	にぶい黄褐色	シルト＋極細砂	かなり強い	やや弱め	黄褐色土粒子～塊 7%、明褐色土粒子 3%、褐色土粒子～塊 15%、炭粒子 5%含む。	
	2	10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	かなり強い	弱い	黄褐色土粒子～塊 25%、褐色土粒子～塊 10%、白色土粒子 1%、炭粒子～塊 7%、φ 10mm 大礫 2%含む。	
	3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂	強い	あり	黄褐色土粒子～塊 10%、明褐色土粒子～塊 5%、褐色土粒子～塊 20%、炭粒子～塊 10%、φ 10～30mm 大礫まれに含む。	
	4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊 30%、明褐色土粒子～塊 3%、褐色土粒子～塊 15%、白色土粒子 1%、炭粒子～塊 10%、φ 10～30mm 大礫 2%含む。	直上で内耳鍋出土。
土坑 2	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	やや弱め	あり	黄褐色土粒子～塊 20%、炭粒子 5%、φ 10～30mm 大礫 5%含む。	
	2	10YR4/1	褐灰色	極細砂	弱い	あり	黄褐色土粒子～塊 20%、褐色土粒子～塊 7%、φ 10～30mm 大礫 1%含む。	非常にもろい。
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	極細砂	弱い	やや弱め	黄褐色土粒子～塊 7%、褐色土粒子～塊 1%、炭粒子～塊 3%、木片少量含む。	
土坑 3	1	2.5Y5/3	黄褐色	シルト	かなり強い	ほとんどなし	黄褐色土粒子～塊 20%、明褐色土粒子～塊 7%、炭粒子～塊 2%、φ 10～30mm 大礫 3%含む。	
	2	10YR4/4	褐色	シルト	かなり強い	ほとんどなし	黄褐色土粒子～塊 7%、明褐色土粒子～塊 2%、炭粒子～塊 7%、φ 30mm 大礫 2%含む。下層に粘土粒子～塊 15%含む。	
土坑 4	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	かなり強い	ほとんどなし	黄褐色土粒子～塊 20%、明褐色土粒子～塊 10%、褐色土粒子～塊 3%、炭粒子～塊 7%含む。	
ピット								
P1	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	強い	強い	黄褐色土粒子～塊 3%、明褐色土粒子 2%、黒色土粒子 2%、灰白色土粒子 1%、褐色土粒子～塊 7%含む。	
	2	10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	強い	やや弱め	黄褐色土粒子～塊 5%、明褐色土粒子～塊 2%、炭粒子～塊 2%、褐色土粒子～塊 10%含む。	
P2	1	10YR3/4	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	ほとんどなし	灰白色土粒子 7%、炭粒子 2%、焼土粒子～塊 30%含む。	
	2	P1 の 1 層目に相当						
P3	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊 3%、暗褐色土粒子～塊 30%、白色土粒子 2%、炭粒子～塊 3%、φ 10mm 大礫微量含む。	
P4	1	P3 の 1 層目に相当						
P5	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	強い	あり	明褐色土粒子～塊 15%、炭粒子～塊 5%、白色土粒子 2%含む。	柱痕か
	2	P3 の 1 層目に相当						
	3	10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊 10%、褐色土粒子～塊 15%、明褐色土粒子 3%、炭粒子 3%含む。	
P6	1	P3 の 1 層目に相当						
	2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	強い	明褐色土粒子 2%、炭粒子 2%含む。	柱痕
	3	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	強い	明褐色土粒子 5%、褐色土粒子～塊 3%含む。	
	4	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	あり	黄褐色土粒子～塊 3%、褐色炭粒子～塊 3%含む。	
P7	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	強い	強い	黄褐色土粒子～塊 15%、明褐色土粒子～塊 2%、炭粒子 2%含む。	柱痕
	2	P3 の 1 層目に相当						
	3	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊 15%、炭粒子 2%含む。	
	4	10YR3/3	暗褐色	シルト	強い	あり	黄褐色土粒子～塊 7%、明褐色土粒子 2%、炭粒子～塊 5%含む。	
P8	1	P3 の 1 層目に相当						
P9	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	極細砂	強い	強い	黄灰色土粒子～塊 10%、黄褐色土粒子 3%、炭粒子 2%含む。	
	2	P7 の 1 層目に類似					褐色土粒子～塊 7%、炭粒子～塊 5%含む。	柱痕か
P10	3	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊 2%、明褐色土粒子～塊 10%、褐色土粒子～塊 7%、炭粒子～塊 5%含む。	
	1	P3 の 1 層目に相当					炭粒子やや多め。	
	2	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊 7%、炭粒子 2%、褐色土粒子～塊 10%含む。	
	3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト＋極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊 5%、明褐色土粒子～塊 2%、炭粒子～塊 5%含む。	柱痕
	4	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	やや弱め	黄褐色土粒子～塊 10%、炭粒子～塊 5%、褐色土粒子～塊 7%含む。	
P11	1	P9 の 1 層目に相当						
	2	10YR4/2	灰黄褐色	細粒砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊 30%、炭粒子～塊 5%、褐色土粒子～塊 7%含む。	

遺構	土層No.	土色	色	土質	しまり	粘性	含有物	備考
P12	1	P11の1層目に相当						
	2	P11の2層目に相当						
P13	1	10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	かなり強い	強い	黄褐色土粒子～塊15%、褐色土粒子～塊15%、明褐色土粒子2%、炭粒子～塊10%、φ10～30mm大礫2%含む。	
	2	10YR5/4	暗褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊10%、褐色土粒子～塊2%、炭粒子～塊5%含む。	
	3	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊7%、褐色土粒子～塊10%、炭粒子～塊5%、明褐色土粒子2%含む。	
	4	10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊15%、褐色土粒子～塊20%、炭粒子～塊5%含む。	
P14	1	P3の1層目に相当						
P15	1	P3の1層目に相当						
P16	1	P3の1層目に相当						
P17	1	10YR4/1	褐灰色	極細砂	中や固め	あり	黄褐色土粒子～塊2%、褐色土粒子～塊7%、φ10～30mm大礫1%含む。	非常にもろい
P18	1	P3の1層目に相当						
	2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	弱い	強い	褐色土粒子3%、明褐色土粒子2%、炭粒子～塊2%含む。	柱痕
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	強い	強い	黄褐色土粒子～塊3%、褐色土粒子～塊3%、明褐色土粒子2%、炭粒子1%含む。	
P19	1	P3の1層目に相当						
P20	1	P3の1層目に相当						
P21	1	P3の1層目に相当						
P22	1	P9の1層目に相当						
	2	10YR3/3	暗褐色	極細砂	中や固め	強い	黄褐色土粒子～塊7%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子3%含む。	
	3	10YR3/2	黒褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊2%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子1%含む。	
P23	1	P9の1層目に相当						
	2	2.5Y4/2	暗灰黄色	極細砂	弱い	あり	黄褐色土粒子～塊15%、明褐色土粒子1%、炭粒子～塊2%含む。	
P24	1	10YR3/3	暗褐色	極細砂	強い	あり	明褐色土粒子～塊15%、炭粒子～塊2%、φ10～30mm大礫2%含む。	
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊5%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子～塊2%含む。	柱痕
	3	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	強い	強い	黄褐色土粒子～塊3%、炭粒子3%含む。	
P25	1	P9の1層目に相当					炭粒子少々含む。	
	2	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊2%、褐色土粒子～塊7%、浜石色土粒子～塊2%、炭粒子～塊3%含む。	
	3	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	強い	中や固め	黄褐色土粒子～塊5%、浜石色土粒子～塊5%、炭粒子2%含む。	
P26	1	P3の1層目に類似					明褐色土粒子～塊2%含む。	
	2	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊7%、褐色土粒子～塊10%、炭粒子～塊5%、φ30～50mm大礫1%含む。	
P27	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	かなり強い	ほとんどなし	明褐色土粒子3%、炭粒子2%、φ30mm大礫7%含む。	
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	極細砂	強い	あり	黄褐色土粒子2%、明褐色土粒子2%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子3%含む。	
	3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	細粒砂	強い	あり	明褐色土粒子2%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子3%、φ10～30mm大礫2%含む。	もろくて粗めの土
P28	1	P3の1層目に相当						
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト＋極細粒砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊5%、炭粒子～塊3%、直径にφ30～50mm大礫多量に含む。	
P29	1	P3の1層目に相当						
P30	1	P3の1層目に相当						
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト＋極細粒砂	かなり強い	中や固め	黄褐色土粒子～塊10%、明褐色土粒子～塊7%、炭粒子～塊5%、φ10～30mm大礫3%、φ50mm大礫1%含む。	
P31	1	P3の1層目に相当						
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	かなり強い	中や固め	黄褐色土粒子～塊10%、明褐色土粒子2%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子～塊5%含む。	
P32	1	P9の1層目に相当						
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	中や固め	あり	黄褐色土粒子～塊7%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子～塊2%含む。	
P33	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂	かなり強い	ほとんどなし	明褐色土粒子～塊15%、浜石色土粒子～塊2%、炭粒子～塊5%、φ30～50mm大礫3%、木片少量含む。	
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	かなり強い	ほとんどなし	黄褐色土粒子～塊3%、明褐色土粒子～塊20%、炭粒子～塊7%含む。	
	3	10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	強い	中や固め	黄褐色土粒子～塊3%、炭粒子～塊3%、φ30mm大礫2%含む。	
	4	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト＋極細粒砂	あり	強い	黄褐色土粒子3%、明褐色土粒子10%、白色土粒子2%、炭粒子～塊2%含む。	
P34	1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	かなり強い	ほとんどなし	黄褐色土粒子～塊5%、明褐色土粒子3%、褐色土粒子～塊10%、炭粒子～塊3%含む。	
	2	10YR3/4	暗褐色	シルト	強い	あり	黄褐色土粒子～塊7%、明褐色土粒子2%、褐色土粒子～塊5%、白色土粒子2%、炭粒子2%含む。	
	3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊5%、褐色土粒子～塊1%含む。柱の木片残る。	柱痕
	4	10YR4/4	にぶい黄褐色	極細砂	中や固め	あり	黄褐色土粒子～塊10%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子1%含む。	
	5	2.5Y4/4	オリーブ褐色	極細砂	中や固め	強い	黄褐色土粒子～塊30%、褐色土粒子～塊2%、炭粒子2%、部分的に崩とのブロック混ざる。	
P35	1	10YR3/4	暗褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色土粒子～塊10%、明褐色土粒子～塊5%、褐色土粒子～塊7%、白色土粒子～塊2%、炭粒子～塊10%、焼土粒子～塊3%、φ5～10mm大礫2%含む。	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊15%、明褐色土粒子3%、褐色土粒子～塊10%、炭粒子から塊7%含む。	
	3	10YR3/3	暗褐色	極細砂	強い	強い	黄褐色土粒子～塊5%、明褐色土粒子5%、褐色土粒子～塊2%、炭粒子3%含む。	
P36	1	10YR4/4	褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色土粒子～塊2%、明褐色土粒子5%、褐色土粒子～塊10%、炭粒子～塊3%含む。	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊3%、明褐色土粒子～塊10%、褐色土粒子～塊2%、炭粒子～塊5%含む。	
	3	10YR3/3	にぶい黄褐色	極細砂	強い	あり	明褐色土粒子～塊20%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子～塊3%含む。	
	4	2.5Y2/3	暗オリーブ褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊3%、明褐色土粒子3%、炭粒子～塊2%含む。	
P37	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	かなり強い	弱い	黄褐色土粒子～塊10%、明褐色土粒子1%、褐色土粒子～塊3%、炭粒子～塊2%含む。	
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂	強い	あり	黄褐色土粒子～塊3%、明褐色土粒子～塊3%、褐色土粒子～塊7%、炭粒子～塊2%含む。	
	3	10YR4/2	灰黄褐色	シルト＋極細粒砂	あり	強い	明褐色土粒子～塊5%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子2%含む。	
	4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊7%、褐色土粒子～塊10%、炭粒子～塊5%含む。	
	5	2.5Y4/4	オリーブ褐色	細粒砂	中や固め	強い	黄褐色土粒子～塊10%、明褐色土粒子～塊2%、炭粒子～塊5%含む。	
P38・40	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	かなり強い	ほとんどなし	黄褐色土粒子～塊7%、明褐色土粒子～塊2%、褐色土粒子～塊3%、炭粒子～塊2%含む。	
P39・42	1	10YR4/2	灰黄褐色	極細砂	かなり強い	ほとんどなし	黄褐色土粒子～塊10%、炭粒子～塊5%、φ30～50mm大礫2%含む。	
P41	1	P38の1層目に相当						
	2	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	あり		
P43	1	P38の1層目に相当						
	2	P41の2層目に相当						
P44・50・51	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	中や固め	黄褐色土粒子～塊7%、明褐色土粒子～塊10%、褐色土粒子～塊7%、炭粒子～塊5%、φ30mm大礫1%含む。	
P45・46・47・48	1	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト	強い	中や固め	黄褐色土粒子～塊10%、明褐色土粒子7%、炭粒子～塊5%含む。	
	2	10YR4/2	にぶい黄褐色	極細砂	あり	あり	黄褐色土粒子～塊5%、明褐色土粒子5%、褐色土粒子～塊7%、炭粒子～塊3%含む。	
P49	1	P45の2層目に相当						
P52・53	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色土粒子～塊10%、明褐色土粒子3%、褐色土粒子～塊20%、炭粒子2%含む。	
	2	10YR3/4	にぶい黄褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊5%、褐色炭粒子～塊3%、炭粒子～塊3%含む。	
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	かなり強い	中や固め	黄褐色土粒子～塊7%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子～塊3%、φ30mm大礫2%含む。	
	2	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	シルト	かなり強い	あり	黄褐色土粒子～塊5%、明褐色土粒子～塊2%、褐色土粒子～塊2%、炭粒子～塊7%含む。	
P54	3	10YR3/3	暗褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊5%、明褐色土粒子～塊5%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子5%含む。	
	4	10YR3/4	にぶい黄褐色	極細砂	かなり強い	中や固め	黄褐色土粒子～塊5%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子3%、φ10～30mm大礫7%、中軟砂20%含む。	
	5	2.5Y4/2	暗灰黄色	細粒砂	あり	ほとんどなし	黄褐色土粒子～塊5%、明褐色土粒子3%、炭粒子3%、φ30mm大礫2%含む。	
P55	1	P54の1層目に相当						
	2	2.5Y4/2	オリーブ褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊2%、明褐色土粒子7%、褐色土粒子～塊15%、炭粒子～塊5%含む。	
P56	1	P38の1層目に相当						
P57	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	かなり強い	中や固め	黄褐色土粒子～塊5%、褐色土粒子～塊10%、炭粒子～塊5%含む。	
	2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	強い	あり	黄褐色土粒子～塊3%、浜石色土粒子～塊5%、褐色土粒子～塊5%、炭粒子～塊3%含む。	
	3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	極細砂	あり	強い	黄褐色土粒子～塊7%、褐色土粒子～塊5%、浜石色土粒子～塊5%、炭粒子～塊3%含む。	

第３節　遺物

1　焼物（第３表、第10図）

今回の調査では、竪穴建物２、土坑１を中心に30点の遺物が出土した。その内訳は、平安時代の灰釉陶器碗２点、中世の土師質土器皿２点・内耳鍋25点、青磁碗１点で、中世の遺構出土品が主体である。本報告では、そのうち図化可能な10点を提示し、他は一覧表に記載した。以下遺構毎にその概要を述べる。

竪穴建物２（1～6）

上層を中心に覆土中から16点が出土し６点を図示した。内訳は、土師質土器皿１点、同内耳鍋14点、青磁碗１点である。１はロクロ成形の土師質土器皿で、赤色粒子を含む密な胎土で褐灰色を呈する。回転糸切り痕を残す底部から胴部を内湾させて立ち上げ、口縁部は外反気味に薄く引き出し端部は尖り気味である。内面は見込み中央が若干高まるがほぼ平坦で、非常に平滑に仕上げる。２は青磁碗の胴下部片で腰が丸く張る。外面にヘラ描きの細線蓮弁紋を施す上田分類ＢⅣ類（註１）に比定されるものである。見込みには印花紋が施される。薄緑色の釉が厚めに掛かる。３～６は土師質土器内耳鍋片である。口縁部片３～５はヨコナデにより内面に２条凹線状の凹凸を作る。３・５は頸部と胴部の境界が明瞭ではなく、３はやや内湾気味に開き、５は胴部からまっすぐ伸びる。４・５の口縁端部は平らな面をなす。

土坑１（7）

内耳鍋片が多数出土した。接合し１個体となった７の他、別個体５片がある。７はほぼ完形の内耳鍋で、口径25.0㎝・底径19.4㎝・高さ13.3㎝を測る。胴部は大きく内湾して開き、頸部はヨコナデを強く施すため内側にくびれ薄くなる。口縁部は内湾気味で、内面に１条凹線状の窪みを有する。口縁端部は幅の狭い水平な面を作り出す。耳は太さが一定せず、環の形から取り付け方まで粗雑な作りである。底部内面は煤状炭化物が染みつき、胴部外面も全体に煤が付着する。一方で砂底となる底部外面には炭化物の付着や変色は見られない。

土坑３（8）

内耳鍋の胴部片１点が出土した。開き気味に立ち上がり、わずかに残る頸部は内外からの強いヨコナデにより胴部の半分程度まで薄手になっている。

P3（9）

ロクロ成形の土師質土器皿の底部片１点が出土した。１に比べ薄手で立ち上がりは外反気味に開く。胎土は橙色を呈する。１に比べ微砂粒が多いが赤色粒子を含む点で共通し、内耳鍋にみられるような粗い胎土とは異なった特徴を有する。

P13・P24

土師質土器内耳鍋の破片がそれぞれ１点出土したが、いずれも胴部片で図化に耐えない。

P55（10）

土師質土器内耳鍋片１点が出土した。頸部が受口状にゆるく内湾して外方に開くが胴部との境界はさほど明瞭ではない。口縁部内面には浅い凹線状の窪みが１条みられる。

検出面

平安時代の灰釉陶器片２点（写真図版4）、土師質土器内耳鍋片が１点得られた。灰釉陶器ａ・ｂは２点ともに薄手の碗で、端部を外方につまみ出し、外面下方に回転ヘラ削り痕が見える。いずれも９世紀代に位置づけられようか。

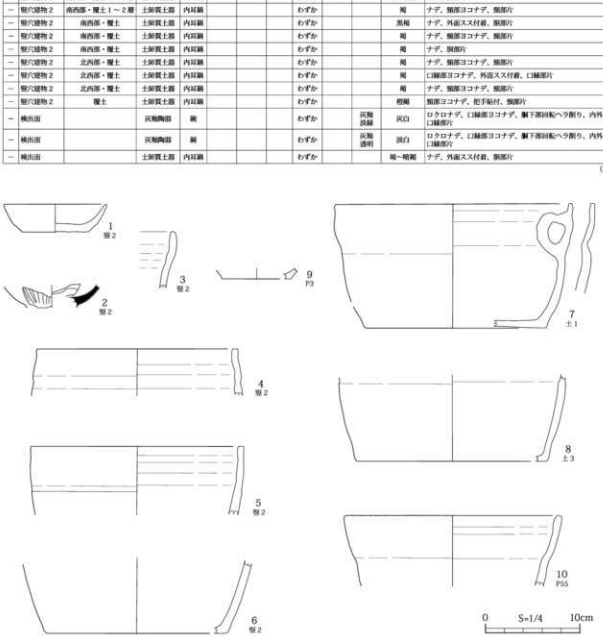
＜註＞

1　上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究　№2』

第３表　焼物観察表

図No.	出土地点		器種		法量（cm）			残存度		色調		成形・調整・胎土の特徴
	遺構	位置・層位	種別	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	釉	胎土	
1	竪穴建物２	北壁西寄・覆土２層	土師質土器	皿	(10.8)	6.7	2.9				褐灰	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り
2	竪穴建物２	北西部・覆土１層	磁器（青磁）	碗					1/8	青磁釉 厚い	灰白	ロクロナデ、底部削り出し高台か、外面線蓮弁紋、内面見込み印花紋、青磁釉施釉
3	竪穴建物２	覆土１～２層	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐～暗褐	口縁部ヨコナデ、外面ス又付着
4	竪穴建物２	覆土１～２層	土師質土器	内耳鍋	(21.2)			1/12			褐	口縁部ヨコナデ、外面ス又付着
5	竪穴建物２	覆土１～２層	土師質土器	内耳鍋	(22.4)			1/10			褐～暗褐	ナデ、口縁部ヨコナデ、内面ス又付着
6	竪穴建物２	覆土１～２層	土師質土器	内耳鍋		(19.4)			1/12		暗褐	ナデ、底部砂目、内外面ス又付着
7	土坑１	覆土	土師質土器	内耳鍋	25.0	(19.4)		完	2/3		褐～暗褐	ナデ、口縁部ヨコナデ、把手貼付、底部砂目、内外面ス又付着
－	土坑１	覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			茶褐	口縁部ヨコナデ、口縁部片
－	土坑１	覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	口縁部ヨコナデ、口縁部片
－	土坑１	覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			暗褐～黒褐	ナデ、外面ス又付着、胴部片
－	土坑１	覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐～暗褐	ナデ、胴部ヨコナデ、外面ス又付着、胴部片
－	土坑１	覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			暗褐～黒褐	ナデ、胴部片
8	土坑３	覆土	土師質土器	内耳鍋		(20.0)			1/12		暗褐	ナデ、口縁部ヨコナデ、底部砂目、内面ス又付着
9	P3	覆土	土師質土器	皿		(7.2)			1/12		橙褐	ロクロナデか、底部磨滅
－	P13	覆土	土師質土器	内耳鍋					わずか		褐	ナデ、内面ス又付着、胴下部片
－	P24	覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			暗褐～黒褐	ナデ、胴部ヨコナデ、内外面ス又付着、胴部片
10	P55	覆土	土師質土器	内耳鍋	(23.0)			1/12			暗褐	ナデ、口縁部ヨコナデ、内外面ス又付着
－	竪穴建物２	南西部・覆土１～２層	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐～暗褐	ナデ、胴部片
－	竪穴建物２	南西部・覆土１～２層	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐～暗褐	ナデ、胴部片
－	竪穴建物２	南西部・覆土１～２層	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	ナデ、胴部ヨコナデ、胴部片
－	竪穴建物２	南西部・覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			黒褐	ナデ、外面ス又付着、胴部片
－	竪穴建物２	南西部・覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	ナデ、胴部ヨコナデ、胴部片
－	竪穴建物２	南西部・覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	ナデ、胴部片
－	竪穴建物２	北西部・覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	ナデ、胴部ヨコナデ、胴部片
－	竪穴建物２	北西部・覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	口縁部ヨコナデ、外面ス又付着、口縁部片
－	竪穴建物２	北西部・覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			褐	ナデ、胴部ヨコナデ、胴部片
－	竪穴建物２	覆土	土師質土器	内耳鍋				わずか			橙褐	胴部ヨコナデ、把手貼付、胴部片
－	検出面		灰釉陶器	碗				わずか		灰釉 淡緑	灰白	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、胴下部回転ヘラ削り、内外面灰釉施釉、口縁部片
－	検出面		灰釉陶器	碗				わずか		灰釉 透明	淡白	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、胴下部回転ヘラ削り、内外面灰釉施釉、口縁部片
－	検出面		土師質土器	内耳鍋				わずか			褐～暗褐	ナデ、外面ス又付着、胴部片

（　）は推定値



第 10 図　出土遺物（1）

2　石器・石製品（第４表、第 11 図）

合計 13 点の石器が出土した。器種の内訳は、凹石 4 点、敲石 3 点、石鉢 1 点、横刃形石器 1 点、石核 2 点、剥片 1 点、礫片 1 点である。このうち、遺跡の主要時期である中世に帰属する可能性のある 8 点を中心に図示し、概要を記す。それ以外のものは一覧表を参照されたい。

凹・敲・磨石（1 ～ 7）　石材は、安山岩 6 点、花崗岩 1 点がある。いずれも円礫～楕円礫を素材にし、使用や加工による大きな形状の変化はみられない。1 は、凹部は両面にあり残存部の最大径は 5.59 ㎝で深さは 1.04 ㎝である。2 は、敲打痕が 1 端部にみられ、1 面に弱い摩面がある。3 は、両面に凹部がみられ、最大径 4.98 ㎝、深さ 0.88 ㎝を計る。また、側面に敲打痕が残る。4 は、凹部が両面にあり、裏面の凹部は浅いが、表面の凹部は比較的深くつき臼である可能性も考えられる。5 の平面形は亜楕円形を呈し、凹部は 1 面のみにあり、最大径は 4.61 ㎝、深さは 0.93 ㎝を計る。6 は、敲打痕が 1 面にある。7 は、敲打痕が 3 箇所あり、磨面が表裏面に磨面が広がる。

凹・敲・磨痕跡の複合状況は、凹・磨 1 点、凹・敲 1 点、敲・磨 1 点、凹のみ 3 点、敲のみ 1 点である。敲打痕の場所は様々で、一定していない。磨面をもつものは比較的小さい礫を素材にしている。

石鉢（8）　石材は暗灰色の安山岩で、2/3 以上破損している。形態は、底からそのまま体部が立ち上がっており、口縁部はほぼ平坦に仕上げられている。摩滅等の使用痕は観察されなかった。

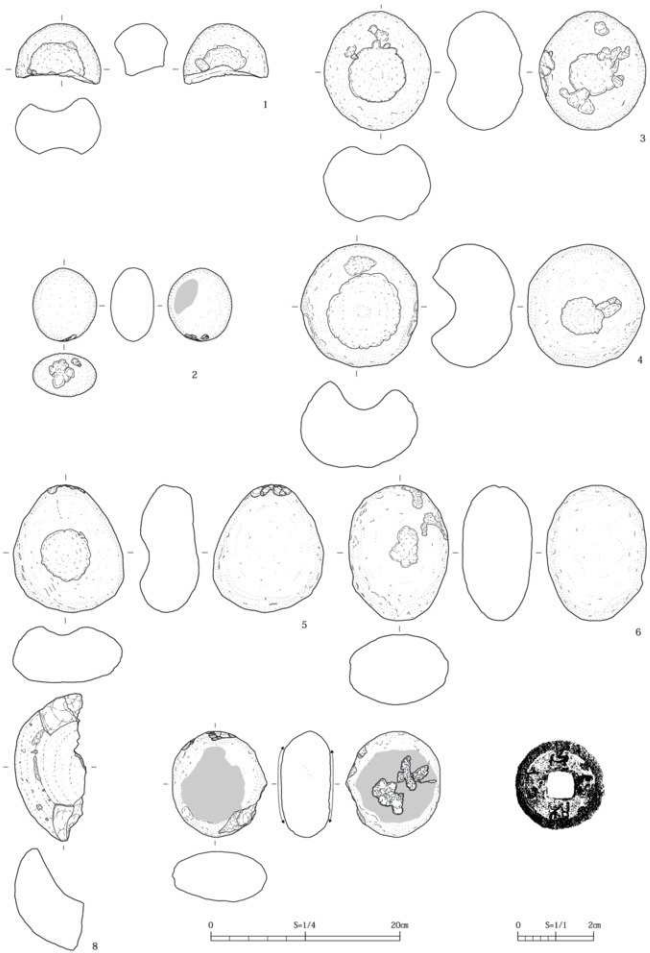
3　金属製品（第 11 図）

土坑 1 の覆土上層から銭「至和通寶」（北宋・初鋳 1054 年）が 1 点出土している。直径 2.4 ㎝。鋳潰れにより文字は判読し難く裏面も剥落が著しい。

第４表　石器・石製品一覧表

ID	図No.	器種	遺構	出土地点	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	破損状況	備　考
7	8	石鉢	竪２	覆土 SE	安山岩	(15.5)	(7.4)	(11.6)	(917.1)	2/3 以上破損	
8		横刃形石器	竪２	覆土 SW	硬砂岩	153.6	47.4	15.8	173.7		縦長剥片素材。水磨されている。
9		礫片	竪２	覆土 SW	砂岩	72.4	54.6	14.6	59.9		
10		剥片	竪２	覆土 NE	粘板岩	80.0	42.1	14.8	46.4		付着物あり
11	1	凹・敲・磨石	竪２	覆土	安山岩	(6.41)	(8.84)	(6.10)	(355.4)	1/2 破損	凹２（表・裏面）、残存部最大径（5.59cm）、深さ（1.04cm）
1	2	凹・敲・磨石	土坑１	覆土	花崗岩	7.59	6.56	4.58	320.3		敲（１端）、磨（裏面）
2		石核	土坑１	覆土	砂岩	118.8	107.9	50.0	835.3		打面数 20、作業面数 3、自然面あり
3	3	凹・敲・磨石	土坑３	№ 1	安山岩	12.43	11.02	8.20	1410.0		凹２（表・裏面）、最大径 4.98cm、深さ 0.88cm、敲（１端）
4	4	凹・敲・磨石	土坑４	№ 1	安山岩	13.01	12.12	8.85	1720.0		凹２（表・裏面）、最大径 6.44cm 、深さ2.34cm
5	5	凹・敲・磨石	土坑４	№ 2	安山岩	13.25	11.71	6.01	1184.6		凹1（表面）、最大径4.61cm、深さ0.93cm、敲（１端）
6	6	凹・敲・磨石	土坑４	№ 3	安山岩	14.25	10.54	7.20	1530.0		敲（表面）
12		石核	P24	底部	チャート	35.0	54.7	34.0	35.8		打面数 2、作業面数 2
13	7	凹・敲・磨石	排土		安山岩	11.08	9.87	5.12	805.9		敲（２端・裏面）、磨（表・裏面）

※（　）内の数値は現存値を表す。
※1,200g未満は0.1g単位、1,200g以上は10g単位。



第 11 図　出土遺物（2）

第Ⅳ章　調査のまとめ

今回、狭い範囲の調査にも関わらず中世のまとまった遺構群を検出することができた。終章として、以下に今回明らかになった点を列記し、調査のまとめとしたい。

① 岩岡氏の館跡と伝わる「字内堀」他半町四方の方形地割に南接する「字寺屋敷」地籍から、竪穴建物跡や掘立柱建物跡を主体とする中世の遺構群を検出した。

② 館跡に関しては、外郭施設を探るため方形地割の境界付近までトレンチを延長したが、調査範囲では堀や柵等、その痕跡は得られなかった。

③ 検出された礎石を有する竪穴建物跡については、主礎石や礎石間の石列に高低２つレベルがあること等から、南北礎石間や東西石列上に主柱や壁を支持する土台を置き、板床を有する蔵建物が上屋復原案の一つとして想定された。

④ 上記遺構を含め、掘り込みが深い方形竪穴建物、方形・土間床の大型土坑、総柱建物等、その多くは収納や貯蔵に関わる施設と推察される。これらの遺構が地名に見える「寺屋敷」と深い関係にあるとみるならば、この調査によって館跡に隣接する寺域の一角を露呈させたことになる。

⑤ 各遺構は、竪１と建２あるいは土１と建１の重複関係にみるように少なくとも２時期の時間幅が認められ、前者がるがN―11～15°―W、後者がN―19～23°―Wと軸方位に変化がみられる。しかし、遺構密度は必ずしも高いとはいえず、比較的短期間に営まれた施設群とみられる。

⑥ 岩岡館跡の方形地割は軸方位がN―8°―Wでる。今回見つかった遺構群はそれを意識したものといえ、両者は密接な関わりをもっていたと考えられる。

⑦ 建物跡の柱間寸法は、１間を単位とするもの（竪１：１間＝5.8～6.1尺、竪２・３：１間＝6.5尺）、と尺の倍数とするもの（建１：５尺～5.5尺）が見られる。

⑧ 遺物は非常に少ないが、青磁碗B4類は15世紀第４四半期に出現し16世紀第１四半期までの間に多くみられるものである。また、内耳鍋には強いヨコナデにより頸部が屈曲する新しい形態のものがある。

以上のように、岩岡館跡本体は未調査ながらも、方形館の存在を示す地割に隣接する寺に関わる地名を有する領域に、戦国時代おそらく遺物や建物のあり方から16世紀代と推定される建物跡群が存在していたことが実際に確かめられた。このことが本調査の最大の成果であり、岩岡館の実態を解明するうえでの考古学的な手掛かりが得られたものといえよう。

岩岡館跡については、これを岩岡氏の館に比定する状況証拠はある。生産の場である岩岡面の低地帯を見下ろす段丘上にある館・寺域・墓域、今回触れなかったが館の東を通過する千国街道や、段丘崖に沿って東走し古い歴史を有する横沢堰等、岩岡氏を取り巻く当時の交通や生産、暮らしに関わる歴史的景観が残っている。しかし残念なことに、ここ二十数年の間に進められたほ場整備事業や環状高家線の整備の結果、少なからず館跡の破壊が進んだのも事実である。第Ⅱ章でも触れたように、『長野県の中世城館跡』や『梓川村誌』を紐解けば、岩岡館を含む梓川左岸一帯は、山腹の山城から段丘崖や内陸の城館まで、松本平でも有数の中世城館分布域の一つであることがわかる。しかし、これらの城館跡群もわずかな例を除いて考古学的な調査はこれまでほとんどなく、こうした点でも今回発掘調査を実施した意義は大きい。

最後に、本調査に際し多大なるご理解とご協力をいただいた地権者ならびに関係機関、現地説明会に大勢ご参加いただくなど地域の文化財に高い関心を寄せていただいた南大妻地区をはじめとする近隣住民の方々、有益な情報をご提供いただいた調査協力者の方々、そして最後に調査スタッフに感謝の意を表して本書の締めくくりとしたい。

調査地の位置と周辺の地形（S ＝ 1：2500）

調査区全景（北から）

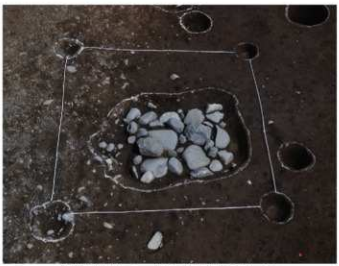
写真図版２

調査区東壁土層断面

竪穴建物１西壁土層断面

竪穴建物１完掘状況（東から）

竪穴建物２・柵１完掘状況（西から）



掘立柱建物３・土坑４完掘（南から）

土坑１礫出土状況（南から）

調査区中北部全景（南から）

掘立柱建物１･２完掘状況(北から)

P6 土層断面（北から）

P18 土層断面（北から）

焼物（S=1/2）

石器・石製品（S=1/4）・金属製品

岩岡館跡調査団

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとしいわおかやかたあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	長野県松本市岩岡館跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№218
編著者名	伊藤　愛、竹原　学、原田健司、宮島義和
編集機関	松本市教育委員会
所在地	〒390-8620　松本市丸の内３番７号　TEL 0263-34-3000（代） （記録・資料保管：松本市立考古博物館　松本市中山3738 番地１　TEL 0263-86-4710）
発行年月日	2015（平成27）年３月31日（平成26年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いわおかやかたあと 岩岡館跡	ながのけん 長野県 まつもとし 松本市 あずさがわやまと 梓川倭 1291-1	20202	1647	36 度 13 分 42 秒	137 度 53 分 36 秒	20140507 ～ 20140614	208 ㎡	梓川地区 新水源地建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
岩岡館跡	城館跡	古代	なし		灰釉陶器	
		中世	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 柵列 ピット	2 基 3 基 4 基 2 基 38 基	焼物・土師質土器（皿・内耳鍋）、青磁（碗） 石器・石製品：凹石・敲石・石鉢他 金属製品：銭	

要約

梓川地区新水源地建設に係る記録保存を目的とした発掘調査。対象地は方形地割の残る岩岡館跡に南接する「宇寺屋敷」にある。調査の結果、礎石を伴うものや深い掘り込みを有する竪穴建物跡、総柱式の掘立柱建物跡、石敷を伴う土坑を取り込む掘立柱建物跡、土間状の底面を有する方形・大型の土坑、柵列等が集中する空間を認めた。これらの建物はいずれも蔵あるいは倉庫等の貯蔵施設の可能性が高く、特に蔵と考えられる礎石を伴う竪穴建物跡は松本周辺では例が少ない。伴出遺物は少ないが、概ね 16 世紀代の遺構群と考えられ、寺屋敷の地名から館に隣接する寺院に関係する施設の一部ではないかとみられ、これまで考古学的な調査の行われていなかった岩岡館跡とその周辺における中世の景観を探る上で重要な資料が得られた。

松本市文化財調査報告№218
長野県松本市
岩 岡 館 跡
―発掘調査報告書―

発行日　平成27年３月31日
発行者　松本市教育委員会
〒390-8620
長野県松本市丸の内３番７号
印　刷　株式会社　交文社